

お詫びと訂正

クリニカルエンジニアリング誌 2016 年 1 月号 (Vol.27 No.1,2016) 「養成施設卒業研究誌上コンペ 2015 結果発表」における誤りについて

クリニカルエンジニアリング誌 2016 年 1 月号 (Vol.27 No.1,2016) の「養成施設卒業研究誌上コンペ 2015 結果発表」(82~83 ページ) において、編集上の誤りがありませんでした。

養成施設卒業研究誌上コンペ参加者をはじめ関係各位、読者の皆様にご迷惑をお掛けしましたことを深くお詫びいたします。

正しい誌面につきましては、下記に掲載いたします。

今後は二度とこのようなことがないように、万全の体制で取り組んで参ります。

この度は多大なご迷惑をお掛けしましたことを重ねてお詫び申し上げます。

2015 年 12 月

(株) 学研メディカル秀潤社

クリニカルエンジニアリング編集室

養成施設卒業研究 誌上コンペ 結果発表

2015

最優秀賞

抜針防止および検知・伝達システムの開発

柴田怜志ほか 大阪ハイテクノロジー専門学校臨床工学技士科

優秀賞

シリアル通信 (RS232C) を用いた人工呼吸器稼働データモニタリング
システムの開発

宮川大延 杏林大学保健学部臨床工学科

佳作

模擬シャントを用いた周波数特性調査および狭窄検知システム作製への
取り組み

村中佑己子ほか 大阪ハイテクノロジー専門学校臨床工学技士科

結果と講評

担当編集主幹 嶋津秀昭

2010年に始まった本企画も6回目となった。今回も臨床工学技士養成施設で前年度に行われた卒業研究論文の中から、各養成施設から推薦のあった論文15編のうち、第1次審査に合格した11編を2015年7月号に掲載した。コンペのエントリー用紙には、目的・方法・結果・考察を必要に応じて図入りで説明してもらい、第1次審査の判定材料とし、第1次審査に合格した応募者には、査読者からのコメントを付して論文作成を依頼し、論文の完成度を上げていただいた。

最終審査は、「臨床工学技士業務との関連の強さ」「論文としてのオリジナリティーと充実度」「研究の面白さ」「疑問点の少なさ」「文章表現の適切さ」「図式などの適切さ」などの観点から、全論文を編集主幹が個別に採点して、その平均値を評価点とした。さらに、それぞれの論文について編集主幹の中から専門を考慮して2名の「担当」を選定し、専門の立場から査読を行った結果を加えて、総合的に審査し、以下のように編集主幹賞を決定した。

【最優秀賞】抜針防止および検知・伝達システムの開発

(柴田怜志ほか / 大阪ハイテクノロジー専門学校臨床工学技士科)

透析中の事故として大きな問題となる抜針を防止するシステムの開発が中心の研究であり、

事故防止の観点から透析支援システムの1つとして期待できる。また、透析に限らず臨床で起こり得るさまざまな抜針事故防止にも利用できる可能性があり、臨床工学分野での実用的な研究として評価した。実用上の課題は残るものの、今後の研究の成果にも期待したい。

【優秀賞】シリアル通信 (RS232C) を用いた人工呼吸器稼働データモニタリングシステムの開発

(宮川大延 / 杏林大学保健学部臨床工学科)

医療機器の稼働状態が使用現場から離れている場所で遠隔モニタできるということは、忙しく働く臨床工学技士にとってありがたいシステムであるといえる。多くの医療機器にデータ出力機能が装備されているので、人工呼吸器にとどまらず幅広く活用できる可能性がある。システムの有用性や性能を評価する方法を考慮しておく必要もあるが、使用者の負担を軽減できるよう、実用上の利便性向上などさらに工夫を重ねてほしい。

【佳作】模擬シャントを用いた周波数特性調査および狭窄検知システム作製への取り組み

(村中佑己子ほか / 大阪ハイテクノロジー専門学校臨床工学技士科)

シャントの狭窄を音響的に評価できる可能性を実験的に検証し、適切な集音位置などを見いだした点は評価できる。一方で、類似の発想による研究もすでに数多く報告されているが、いずれも実用化には至っていないようである。おそらく再現性や臨床上の課題が解決できていないことに原因があると思われるが、手法自体は容易であるので挑戦を続けてほしい。

【全体的講評】

掲載された11編の卒業研究論文は、臨床工学技士の業務に深くかかわるものが多く、いずれも学生の研究という視点を考慮すれば、十分に質の高い論文といえる。本誌主催の「卒業研究誌上コンペ」としての趣旨を十分理解されてのテーマ選定であったことがわかる。しかし、研究期間や論文にまとめる時間の短さが、論文構成の未熟さ・不適合さを招いている例も多く、「研究の進め方」「論文の書き方」などに関して卒業研究の指導教員にも一層の努力をお願いしたい。

主たる内容が指導教員の研究の延長線上にあると判断できる論文もかなりみられた。卒業研究の目的が、研究の考え方や方法などの入門の機会であることは理解できるものの、論文の水準を公平に判断するうえで、どこまでが学生の研究なのかの判定が難しく、評価に戸惑うこともあった。本誌のコンペでは、学生の主体性についての評価を審査に取り入れる方策を検討していく予定である。

なお、応募に関しては大学からの論文が大半であり、専門学校からの論文はわずか2校(4編)にとどまった。卒業研究に割ける時間や指導教員の不足などのマイナス要因が原因であろうが、アイデア次第で克服できるものと思われるので、各校の一層の工夫と努力を期待したい。

養成施設卒業研究2016 開催決定!
誌上コンペ 2016年7月号での「養成施設卒業研究誌上コンペ2016」の開催が決定しました。